

【報告】 2023年2月23日

東京工芸大学カラボギャラリー第10回企画展 ―色を記録する展― 展示解説とパネルディスカッションの会

―小西六本店六櫻社（現コニカミノルタ）が日本初開発の天然色印画と
コニカラー映画の展示を通してみる日本写真工業の歴史―

本企画は、日本写真学会の創立100周年（2026年）を記念するイベントのひとつで、同じく2023年に創立100周年を迎えた東京工芸大学の協力により開催された。

同大学の色の国際科学芸術研究センターカラボギャラリーで開催されている企画展を中心に構成されたイベントである。

晴天にも恵まれ、30名を越える参加者が、会場の随所で活発な議論を交わす熱いイベントとなった。



会場の厚木キャンパスに設置されている工芸大100周年記念モニュメント



展示が開催されているカラボギャラリー

企画展は、小西六本店（現コニカミノルタ株式会社）の製造部門、六櫻社の技師長で、のちに東京工芸大学の教授となった江頭春樹の開発によるカラー画像作成法「転写現像紙」と、同社の毛利廣雄らが開発した「コニカラー映画システム」を紹介するもので、同大学に保存されていた貴重な資料が展示されている。



初めに展示の解説動画を、さらに生解説も交えて鑑賞



解説は、今回の企画展の展示ディレクター、矢島先生



解説動画に続いて、展示を見学



貴重な展示資料には、多くの参加者が、興味津々で見入っていた



随所で活発な質疑も展開された



パネルディスカッションでは、冒頭、矢島先生から、保存されていた資料の詳細、展示に至るまでの経緯、そして、両方式が開発されていく過程などが紹介された。さらに展示実現までの、さまざまな苦労話も聞くことができた。

続いて、高田先生からの、異なる方式による2つのカラー写真法が同時に開発されていた点が、写真史から見て大変興味深いとの意見を受け、両方式の特徴、利点・欠点などをめぐる議論がおこなわれた。会場からも、色素転写方式によるカラー印画作成法が、その後も長く使われていたこと、極めて高い保存性を持つことなどが紹介された。

そして、さまざまなシステムが、技術進化とユーザーニーズによって次々と形を変えて発展してきた事例が飯島先生から紹介され、議論は、カラー写真法にとどまらないところにまで展開していった。



司会・進行
山田先生
写真学会副会長



パネラー
矢島先生
東京工芸大学



パネラー
高田先生
元千葉大学



パネラー
飯島先生
元コニカミノルタ

矢島先生からは、この2つのカラー写真法が、一般のユーザにどの程度使われたのかよくわからないこと、実際に市販されたのかどうかも必ずしも明確でないとのお話があった。高田先生から、写真学会のさまざまな場で呼びかけ情報を得ていくことが提案された。何か情報をお持ちの方は、ぜひ、学会事務局へご一報ください。



参加者全員による記念撮影
工芸大の吉野学長、義江前学長にもご参加いただきました

ご参加いただいたみなさま、お疲れさまでした。
企画・運営に当たられた関係者のみなさまにも感謝いたします。

以下のサイトもぜひご覧ください。

東京工芸大学 100周年記念特設サイト

<https://100th.t-kougei.ac.jp/#area1>

東京工芸大学 色の科学芸術国際センターのサイト

<https://collab.t-kougei.ac.jp/>

カラボギャラリー第10回企画展 -色を記録する展-

<https://collab.t-kougei.ac.jp/10th-exhibition/>

報告書作成（文責）：水口 淳